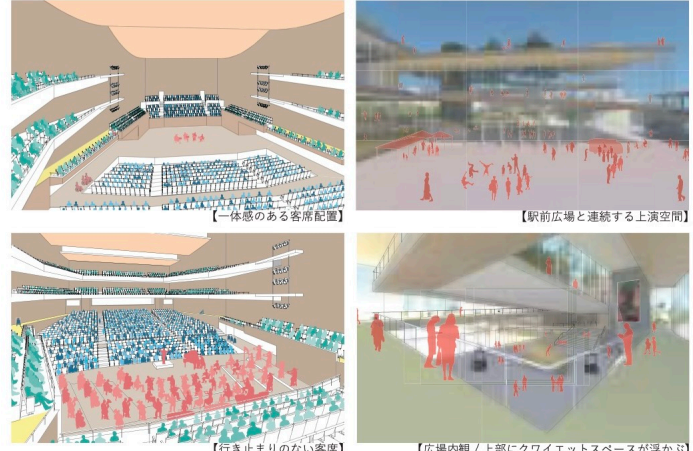


# 閉じた円環と開いた螺旋

プロによる格式の高い上演と市民によるカジュアルな上演に対応し、また文化芸術の総合拠点と災害文化の創造拠点として、二つの対照的な空間を設けます。

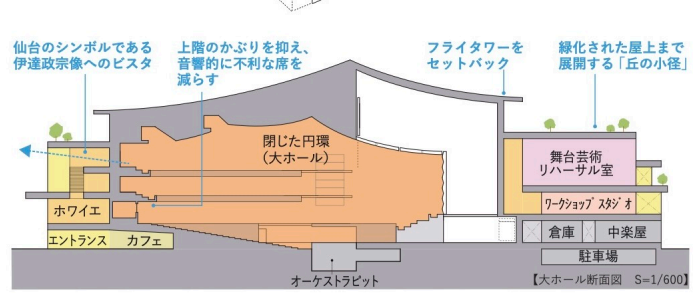
**■閉じた円環 - 行き止まりのないホール**  
大ホールは、中央に設けられた舞台を客席とホワイエが円環状に取り囲む、同心型の空間構成とします。四周に配されたホワイエのどこからでも客席にアクセスでき、客席内で回遊することも可能です。震災のメモリアルとして、一体感を生み出すホールです。

**■開いた螺旋 - 輪回上昇するホール**  
駅前広場と連続する位置に開かれた上演空間を設けます。上部に杜が浮かび、その周囲を巡りながら昇っていく空間構成とします。周囲の景色を見晴らしながら、様々なパフォーマンスに触れることができ、客席内でも回遊することも可能です。震災のメモリアルとして、一体感を生み出すホールです。



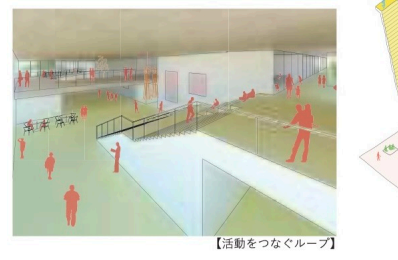
**■フレキシブルな可動客席ユニット**  
行き止まりのない客席を実現するためのデバイスとして、伸縮式で組み合わせを変えられる可動客席ユニットを用意します。

**■市民ステージとしての櫓**  
開いた螺旋の中央にカジュアルな上演を演出するための道具立てとして、可動ステージとなる「櫓」を設けます。



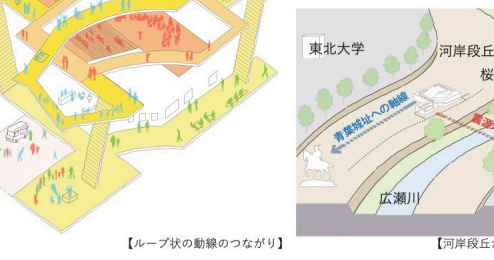
## ■丘の小径 - セレンディビティを生み出す動線

文化芸術創造と災害文化創造のための諸機能を大ホールを取り囲むように配置し、それらを立体的に巡っていくループ状の動線「丘の小径」を設けます。各機能に多義性を持たせられるように動線を交差 / 並列させ、活動間での視線の交錯を、偶発的な交流 / 連携を生み出していきます。



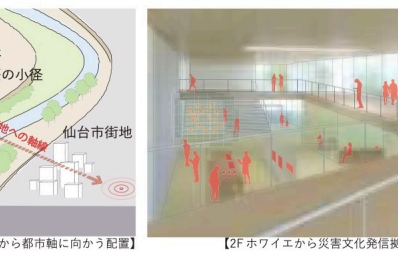
## ■2つの軸線と河岸段丘

広瀬川の河岸段丘上に2つのホールを斜めにずらして配置します。「閉じた円環」の軸線は仙台のシンボルでもある青葉城址へと向かい、「開いた螺旋」は震災の震源地と対面します。音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点としてのメッセを建築の形に具現化し、訪れた人々に伝えていきます。



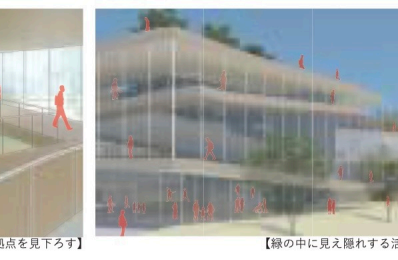
## ■動線状の災害文化発信拠点

災害文化創造支援・発信エリアは広瀬川の緑地に沿ったリニアな空間構成とします。その活動を外部へ向けて発信するとともに、ワークショップゾーンへの移動時に通り抜けたり、上階のホワイエから吹き抜け越しにその様子をうかがったりすることができ、さらに「開いた螺旋」とつながっていきます。

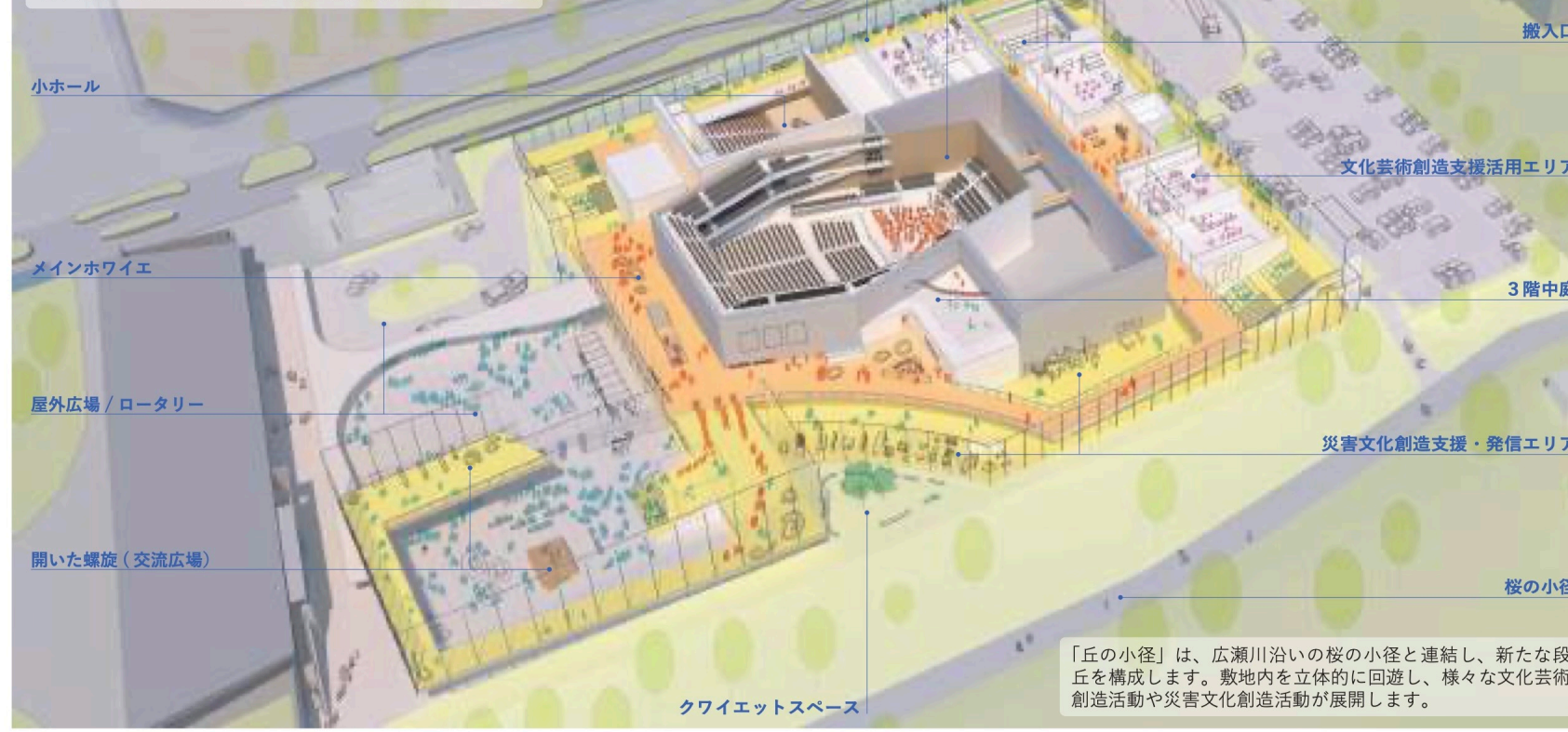


## ■仙台の旗幟となる大屋根

フライタワーをセットバックさせ、大きな壁面が圧迫感を与えることを回避します。緩やかに弧を描く大屋根が杜の上に浮かび、まちへとホールの存在をアピールします。足もとでは緑の間に人々の活動が見え隠れし、夜になると「開いた螺旋」が行灯のように浮かび上がります。



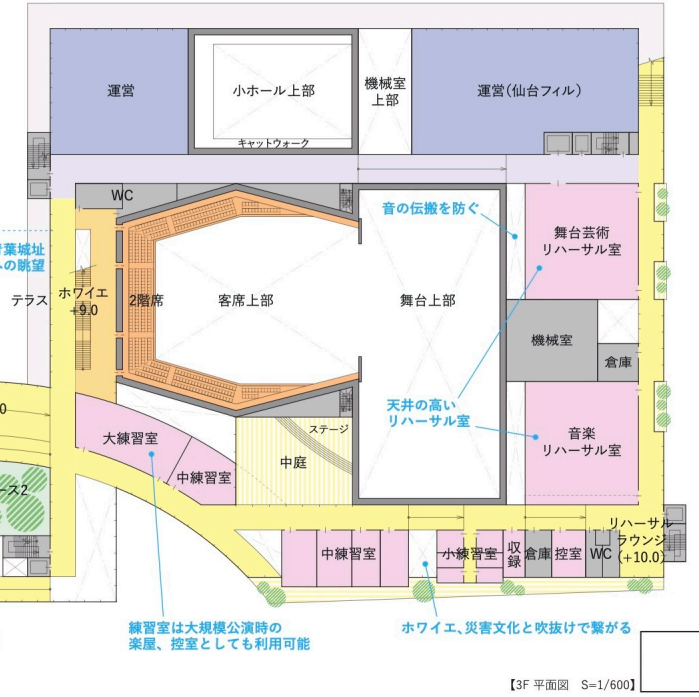
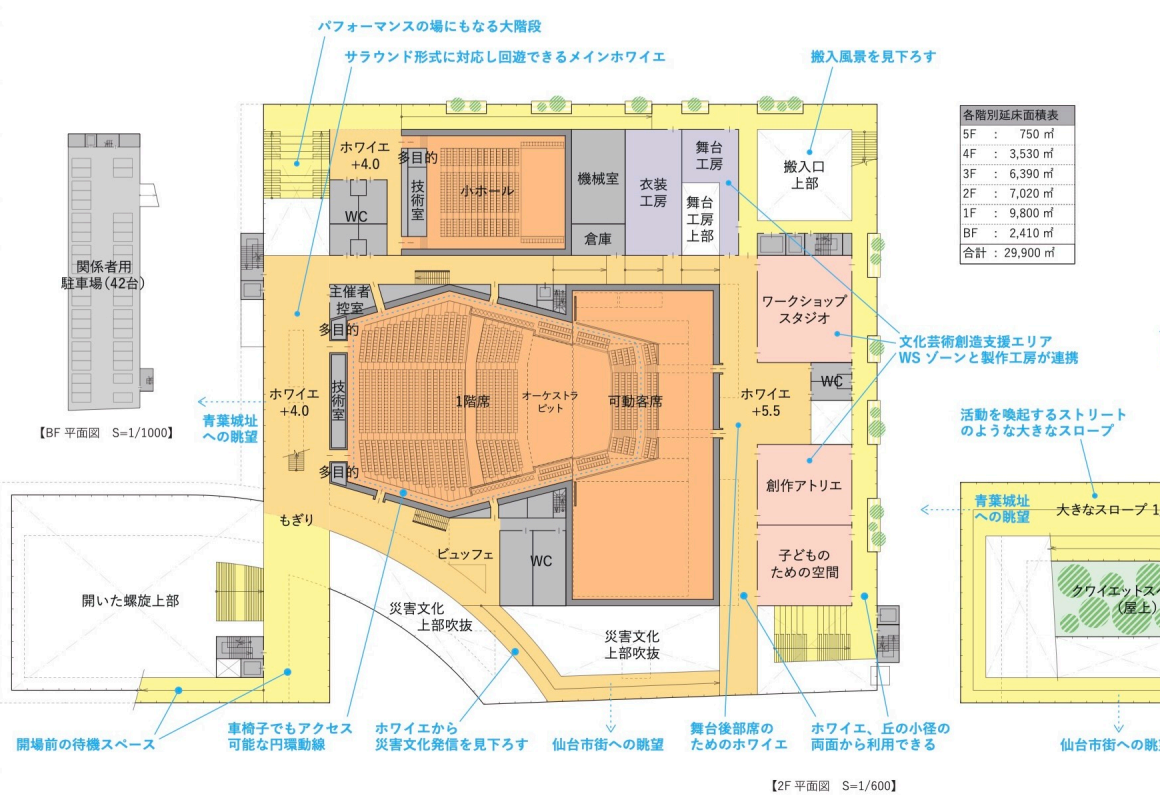
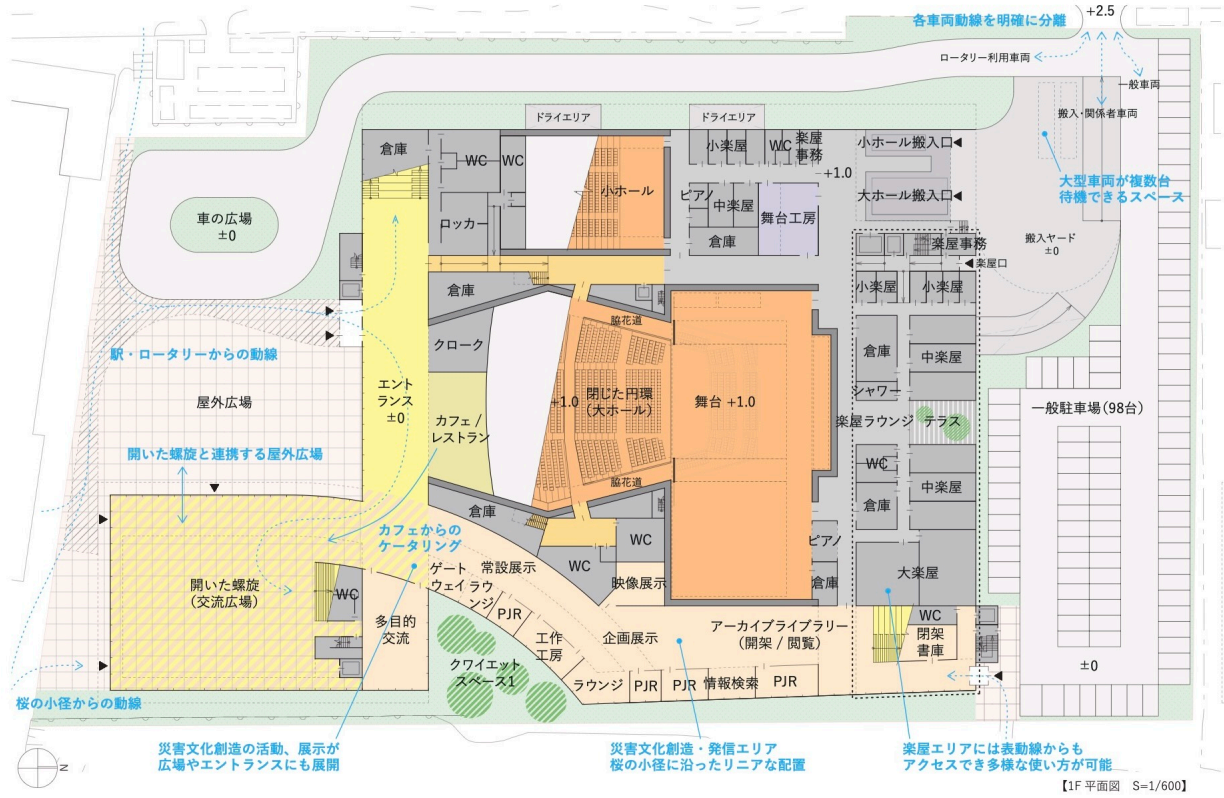
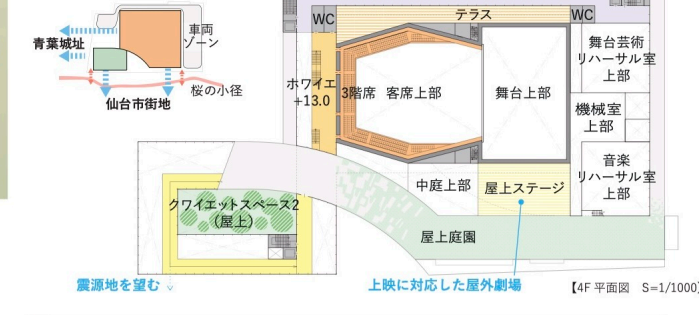
8の字を描く「丘の小径」の中央部には性格の異なる二つの上演 / 鑑賞空間が形作られます。周囲の小径からアクセスされ舞台へと収束する「閉じた円環」と、明るい箱の中を小径が巡り空へと発散する「開いた螺旋」が配置されます。



**■無限と極小の屋上庭園**  
屋上はアンジュレーションを持たせた上で緑化を行います。杜の中を∞状に移動しながら散策し思索することができます。屋上全体に小さな居場所を散在させ、それぞれが過去や未来に思いを馳せつつ、静かに時を過ごすクワイエットスペースと位置づけます。ホールの大屋根が屋上に親密な軒下空間を生み出します。



**■敷地特性を活かした配置**  
車両ゾーンは北と西にまとめ、南と東への眺望を活かします。同時に桜の小径との連携を考慮します。



各階別延床面積表

5F	750㎡
4F	3,530㎡
3F	6,390㎡
2F	7,020㎡
1F	9,800㎡
BF	2,410㎡
合計	29,900㎡